

## コンフリクトをめぐる公共的な対話の可能性

櫻本直樹(文学研究科 臨床哲学)

### はじめに

今回の調査研究では、コンフリクトという問題を考えるにあたってエコツーリズム、あるいはその考え方を実践するためのツアー形態であるエコツアーを取りあげた。では、なぜコンフリクトを考えるにあたってエコツーリズムなのか。それは、経済と環境、開発と自然保護という二つの要求の対立から生じるコンフリクトに対して、その両方の要求を取り入れ、つまり経済的枠組みの中に自然保護を取り込むことで、そこに生じるコンフリクトに対処しようとする。その意味で、それはコンフリクトに対するアプローチとして一定の評価はできる。しかしながら、自然を保護しつつ、観光を持続させるというエコツーリズムの考え方自体も、観光業の成立、自然保護、地域振興という異なる目的をもち、そのどれを出発点とするのか、また同じ出発点をとるにしても、それを担う主体の考え方ややり方などを巡って、多くのコンフリクトにいたる可能性を孕んでいる。それゆえ、エコツアーに直接的/間接的に携わる人々にかかわることを通して、エコツアーを含めたツアー全体の現状を把握すると共に、そこにあるさまざまなコンフリクト（もしくはその可能性を含め）を見出すことが、コンフリクトを考えるための素材になるであろう、と考えた。

### 調査の内容

場所：石垣島

期間：10月19日（金）から25日（木） 7日間

調査の方法としては、実際にエコツアーに参加すると同時に、聞き取りを行った。具体的には、まず2つのエコツアーサービスで3つのエコツアー（カヤック、シュノーケリング、トレッキング）に参加をした。エコツアー経営者に対しては、エコツアーの現状や問題を中心に、一緒に参加した人、あるいは別のエコツアーの参加者に対しては、エコツアーについての認識や感想など、宿泊施設近くの喫茶店経営者に対しては、県外からの移住者やエコツアーについての認識など、石垣市・竹富町の観光協会では、観光客の最近の動向などを中心に、聞き取りを行った。その際、聞き取りはあまり形式的にならないように心がけ、聞いたことはメモをとり、録音できる状況では録音した。その際、自らの身分は、エコツアーに興味のある院生（一観光客）とし、積極的に調査研究である旨は伝えなかった。また、市営図書館で、エコツアーに関する文献や新聞記事などの資料収集を行った。

### 成果

今回の調査研究の成果としては、エコツーリズム/エコツアーにかかわる人々に対する聞き取りによって、その人たちの発言その他に多くのコンフリクトないしその可能性を見ることができ、また今後コンフリクトという問題を考える上で、重要な論点もいくつか見出すことができた。例えば、聞き取りを行ったガイドは口をそろえて「島外出身者でない

と石垣島の自然の中にあるよさはわからない」と言う。ここでは 島外出身者か地元出身者か ということが対立している。確かに、エコツアーガイドには資格がいらず、地元出身者の中には昨日まで違う仕事をしていた人が今日からガイドをするということがあるらしい。彼らからすれば、「儲かるから始めたのではないか」という疑念があるようだが、彼ら自身はどうだったのだろうか。地元出身者であっても、彼らと同様に石垣島の自然をもっと知ってほしい、と考えているのかもしれない。また、ここでは違いが残るにしても、リゾート開発との対立という文脈にのせると、両者は同じ島に住む島民であり、石垣島の自然を必要とする人々である。またあるガイドは、エコツアーに不可欠なものとして「(観光客が)家に帰って 何か が変わるということだ」と言った。ここにも多くのズレがあるように思われる。まず、エコツアーが観光客にとって非日常の事柄であるのに対し、「家に帰って」というのは観光客にとっては日常での事柄である。この 日常性と非日常性 という対立は観光客とガイドの間でも問題になる。つまり、ガイドにとってエコツアーは、仕事という意味では日常の営みであるのに対して、観光客にとっては観光という非日常的な営みである。また、ガイドの知ってほしいという想いと観光客の遊びたいという想いのズレ、あるいは、仮にその観光客の環境意識が高かったとしても、そこで見ている自然は両者にとって同じではなく、そこには まなざしのズレ が生じているかも知れないのである。以上、聞き取りをとおして見えてきたものを、ここでは二つだけ提示したが、これだけを見ても、エコツーリズムという考え方もつ、その可能性を含めた意味でも、さまざまなコンフリクトが見えてくるといえるだろう。

おわりに：今後の課題

さて、今後何を考慮する必要があるのか。それをここでは3つ提示する。コンフリクトは コンフリクト として対象化してしまうことによって見えなくなってしまうもの(無意識のうちに前提としてしまっているものや違和感、ズレ、引っかけ等)がある。それゆえ、コンフリクトを考える際には、具体的な人や場面との関係で、そして多様なコンフリクトとの関係の中で考えていく必要があるということ。コンフリクトが生じている際には、そこでは当事者の間に何らかのディスコミュニケーションが起きていると考えられ、それぞれが、個々の前提を見直すようなコミュニケーションの 枠組み を考え、コミュニケーションによってコンフリクトを乗り越えていくような方向性を考えること。

その際、そのコンフリクトにかかわる研究者の位置づけ、つまり、私を含め調査研究目的でかかわることによってコンフリクトを掘り起こしてしまう、その意味をどう考えるのか、ということである。

今回の調査研究は、短期間であったために調査のための調査くらいの成果しか出せず、調査の内容ややり方においても不十分な点が多かったように思われる。今後は、関係者に対する聞き取りを継続すると共に、地元の人々に対する影響や他のツアー形態との関係、リゾート建設をめぐる実際の話し合いの場面等を視野に入れ調査研究を進める。